ネパールとネパールの人々（下）

ネパール語通訳（JICA 研修監理員）
野　津　治　仁

前号ではネパールの地理と歴史を中心に概観してみた。今号では主として，そこにどのような人たちが暮らしているのかを見てみたい。もちろんネパール人とはこうなのだ，と一言で語ることはできないし，全国民がそうだ，というわけでもない。あくまでも私個人が見た，感じたネパールの人であることをあらかじめお断りしておきたい。

【多言語・多民族，カースト国家】

ネパールは，前号でも述べたように多岐多様な民族が集まっている多言語・多民族国家である。印欧語族であるインド・アーリア系の言語を話す民族，チベット・ビルマ諸語を話す民族,その他ドラビダ系等の言語を話す民族などである。ネパール政府は 125 の母語，130 もの民族集団・カーストに区分して（どちらも「不明」および「その他」を含む），統計を出している。この数は明らかに多すぎて不自然なのだが，ネパールではこのような民族とカースト的要素が複雑に絡み合っている。（その絡み合い具合についてまでは本稿では深くは触れない。）

全ネパール国民の 80 パーセント以上の人はネパール語を理解するといわれている。母語統計の中でも最も多数（約 45 パーセント）を占めるのが，ネパール語を母語としている人々である。実は元来ネパール語を話す民族集団を一括りにする名称（民族名）はない。これでは文化人類学等の学問にとっては不都合なので，学者たちの間では「パルバテ・ヒンドゥー（山のヒンズー教徒）」と呼びならわされているが，文化人類学や民族学を学んだことのないネパール人には全く馴染みのない，聞いたことのない呼称である。ネパール語を母語とする人々には,この「パルバテ・ヒンドゥー」と元々の自分の民族語を話さず（あるいはあまり理解できず）ネパール語を母語としている人の数も含まれる。ネパール語はインド・アーリア系の言語で，その起源はサンスクリット語にさかのぼる。インド亜大陸でサンスクリット語が時の流れとともにいろいろな地域で独自に変化していく中で，進化してできてきた言語である。民族集団・カースト別の統計では，元々ネパール語を母語とする「パルバテ・ヒンドゥー」は,バウン（ブラーマン),チェトリ（クシャトリヤ）やダリット（不可触民）にあたるカミ,ダマイ,サルキなどのカーストおよび職能に更に細分され，それぞれ別の区分に分けられている。

このように，同じ母語を話す民族がカーストや氏族によって別々の民族・カースト集団として扱われたり，逆に言語学的には同一の民族の方言の範疇に入ると思われるものが，それぞれ独立した母語として扱われたりしていて非常にわかりにくい。

ネパールの憲法では国の公用語として「デバナガリ文字で書かれるネパール語がネパー

ルの公用語である」（第７条１）とする一方で，「ネパールで話されるすべての母語が国語（National Language）である」（第６条）と規定されている。この憲法第６条の条文は表現自体があいまいで，いろいろな解釈もできるだろうが，そのまま読めばとんでもないことになる。例えば，ネパールにはそれほど数は多くないだろうが，外国から帰化したネパール国籍の人もいる。その中には元々日本語が母語の日本人で，ネパール人になった人もいる。ネパール国籍を取ったからといって，すぐさま母語がネパール語になるわけでは当然ない。すると「日本語はネパールの国語の一つだ」という奇妙なことになる。実際，政府の統計にある 125 の言語の中には，アラビア語８人，スペイン語 16 人，ロシア語 16 人，フランス語 34 人なども含まれている（日本語は「その他」の中に含まれると思われる）。民族意識の高まりの中，長年支配階級の言語であったネパール語に対する反発が生んだ矛盾の一つである（ちなみにこれより前の憲法では，ネパール語を国語と規定して，ネパールの国内で話されるすべての言語は国民語である，としていた）。

【多言語社会の中での生き方】

ネパールでは日本のように，通訳や翻訳の文化は発達していない。日本では明治維新以降，富国強兵策の一環として，当時の先進諸国に留学生を派遣し，学び持ち帰ったものを日本語で紹介したという事実が，文化として今日までも根付いている。日本ではテレビなどの公共のものにかぎらず，多くのイベントなどでも，日本語以外の外国語には字幕であったり，通訳がついたりする。映画などは字幕版，吹き替え版の両方があるものも珍しくない。外国語の書籍や文書でも，日本人向けのものには翻訳がある。学術の世界や一部ビジネスの世界以外では，日本人向けには日本語の翻訳，通訳をつけるのが当たり前になっている。

しかし後発発展途上国であるネパールには，通訳はおろか翻訳の文化もほとんど根付いていない。実際ネパールの大学レベルになると一部の科目を除いて，多くの授業が外国語である英語で行われる。ネパール人の教授がネパール人の学生に対して社会学の授業を英語でしているのを見て，とても奇異に思いその教授になぜわざわざ英語で授業をするのか尋ねてみたことがある。すると「自分はアメリカに留学し英語で学び学位を取った。教科書も英語の教科書を使っているし，英語で授業をする方がやりやすい。それに専門用語はネパール語だとむつかしい。それで英語で授業をしているのだ」と。「専門用語がネパール語だとむつかしい」というのは大きな誤解だと筆者は思うが，それでもまだある程度は理解できるとしても，授業自体を英語で行うことに何の意味があるというのだろう。本稿で扱う内容からは少しそれるが，このような状態では「英語」ができる者だけが高等教育を受けられることになり，一部特権階級はさらに特権を得，その他の人々はずっとそのままということになる。国全体の発展などとうてい望めるはずがないだろう。

普通のネパール人を対象としたイベントやテレビ番組の中でも，ネパール人同士なのに英語で話をしている場面を目にするのは決して珍しいことではない。通訳や字幕はないので，英語が得意でない聴衆は大体のところで理解するしかない。しかもこれは英語という

外国語に限ったことでは，実はない。ネパール国民の中には多くの民族が住み，異なる言語文化を持った人々がいて，ほぼ共通語であるネパール語がほとんどわからない人や，あまり得意でない人も多い。それが日常化すると，常に他人が話していることを「大体」でしか聞かなくなるであろうことは，想像に難くない。

その際に，あらかじめその場の状況や話の流れから，相手がどのようなことを言いたいのかを推測しながら聞いていることになる。なので話の行き違い，勘違いもよく発生する。後日「そんな話は聞いていなかった」ということも少なくない。

【親切なネパールの人】

ネパールの人は日本人に対して概して親切でやさしい。それはこれまで日本政府が多大な援助をネパールにしてきたこと，同じアジアの国として第２次世界大戦後急速な発展を遂げ先進国の仲間入りをしたことへの敬意と憧れ，日本人は比較的に穏やかで争いを好まないやさしい国民性があること，などの理由が考えられるだろう。

ネパール人の親切さは，例えば道を尋ねられたり，何かを質問されたりする際にもこれがあてはまる。日本では知ったかぶりは良くないこととされているので，知らないときは大抵の人なら「知らない」と答える。しかしネパールでよく遭遇するのは，知っていても知らなくても，とりあえず「あっちだ」と教えてくれる。（もちろん「知らない」と答えてくれる人もいる）もしそれが間違った答えだったと後で分かれば，日本人は「嘘をつかれた」と思う。ネパール人は「嘘つきだ」と思ってしまう。日本では「嘘をつくのは泥棒の始まり」だとして小さいころから「嘘をついてはいけない」と親や学校で教えられて育つ。しかしネパールの人は「大体の感じ」で答えてしまうのであって，必ずしも「嘘をつこう」と思って答えているのではないのだろう。逆に，親切だから，大体でもなんとかこの人に教えてあげよう，という考え方が働くのだ，とも考えられる。

先日もある日本の女性から，かつてネパールの山奥を一人で歩いていて（山奥を一人で歩くこと自体問題なのだが）村で道を尋ねるとあっちだと教えられ，その通りに行ってみたものの，実はそれは目的地とは全く逆の方向で，人が一人ようやく通れるだけの断崖絶壁の道に牛がいて，なんとか通り抜けたものの一歩間違えば谷底に転落し，誰にも知られることなく命を失っていたかもしれない，という恐怖体験とともにネパール人は信じられない，という話を聞いた。その道を教えたネパール人は，あまり深く考えないで発した自らの言葉が，他人の生死に関わるような事態にさえなりうる可能性まで想像していなかったはずだ。そこでこの日本女性に「不完全な親切心のための行き違いだった可能性があること」をお話しすると，「この話を聞いて少し胸のつかえが軽くなりました」と言われたことがあった。

【教育の質の大切さ】

ネパールでは，国を挙げて先進国に追いつくために頑張ろう，というよりも，個々人の生活を豊かにしたいとの思いの方が一般的には強いように感じられる。そのため，産業も

インフラもほとんど未発達のネパールの国内にいるよりも，もっと豊かな国に行ってそこで稼ぐのが方法として手っ取り早いと考える人が多い。あるいはそのような先進国に移住することを望む。現に国の全人口が 3,000 万人に満たない中，驚くことに約 500 万人が国外に滞在しているといわれている。昨年ネパールのとある清廉潔癖で有名な一人の大臣の発案で，外国の永住権やグリーンカードを既に取得あるいは申請している公務員はただちに退職届を提出すること，今後そのような申請をしようとするものは退職届を出してからにすること，それをしない者は免職するという内容の法案を通した。その結果約 1,500 人の公務員が退職届を出した，という。これは何を意味することなのか，考えるだけでもこの国が憂うるべき状態の国であることがわかる。

日本では想像力や創造力を伸ばす教育が遅れていると，ひところ盛んに言われていたことがあった。ネパールではその比ではない。小学校レベルから修士課程レベルまで，想像力や創造力を養う教育はほぼ皆無といっていい。筆者が通った国立トリブバン大学修士課程のネパール語・文学専攻のクラスでも，ゼミはゼロだし，議論や討論を行う場はほぼなかった。すべての授業が講義であり，ただただ試験に必要な知識を詰め込まれる。学年末に行われる全国一斉の試験でそれらを一気に吐き出す。当然そこに自分独自の考えを述べることは許されず，教えられた正しい答えを書くだけである（唯一自分の考えを展開できるのは学位論文のみ）。

因みに学年末試験は，同一科目同一レベルの試験が同じ試験問題で全国一斉に行われ，ネパール全土にある 200 を超えるトリブバン大学傘下のキャンパス毎の特徴や独自性は全くなく，同じ時間帯に同じ試験が行われる。修士課程レベルだと一科目につき 4 時間，4 科目 4 日間にわたって行われた。12 ページのノートが解答用紙として受験者に配られ，設問もほとんどが筆記式のもので，授業で詰め込んだ知識をその解答ノートにとにかく速いスピードで埋めていく。中には解答ノートのお代わりをするツワモノもいるが，筆者は 12 ページを埋めるのが精いっぱいでノートのお代わりをしたことはなかった。

【アバウトな国民性】

一概に「ネパールでは」とか「ネパールの人は」ということはもちろん言えないのではあるが，しいて一言で国民性を言い表すならば「アバウト」ではないかと筆者は思っている。その「アバウト」さはどこから来るかというと，想像力や創造力を養う教育がなされていない，ということこそが大きな要因の一つではないかと感じる。何かの計画を立てるときに，完成形に至る手順を考え，その一つ一つの手順にかかる時間や費用，またその効果などを考えていき，最終的に全体でどのくらいの時間で，どのくらいの費用をかけ，その結果どのような効果が期待できるか，ということを論理的に緻密に考えていくのが，日本で考えられる一般的な方法だろう。ところが想像力や創造力が養われていないと，そのような緻密な検討なしに作られた計画が実行された際にどのようなことになるか，ということを想像することができなくて，計画通りに物事が進まない，という結果になる。学校教育の現場で想像力や創造力を養う教育が行われない，ということはすなわち論理的思考

能力も養われないことになる。

日本で台風接近の情報が得られると，通勤電車の遅れ，混雑などを予測していつもより朝１時間，２時間早めに家を出るという人も多いだろう。ネパールでは何か予測可能な事態があったとしても，それに対応するということはあまり聞かない。人間，楽な方への想像は比較的しやすいが，困難な方への想像はなかなかしにくいものである。それも相まっておおざっぱなマイナスの想像しか働かせないため，筆者が留学中でも，大雨の日など市街地から離れた郊外にある大学キャンパスに来る学生は半分くらい，教授陣はさらに少なかった。自分の都合は考えることができても，自分がした行動，あるいはしなかった行動が他人に，ひいては社会に対してどのような影響が及ぶかを想像することをしない，否できないのであろう。

日本でも簡単に，教育の遅れているネパールに校舎を建てよう，そのための寄付やボランティアをしよう，といった活動のことをよく耳にする。校舎を建てたところで，そこでどのような教育がなされるのか，ということまで考えないとあまり効果は期待できないというのが現実である。まずは想像力と創造力の大切さを教えることができる教師を大量に養成することこそが最も必要なのではないだろうか。

【終わりに】

始めに書いたように，本稿で述べられていることは，筆者が自分の目を通して見てきた範囲の中での「ネパール」である。当然これがネパールのすべてではない。あるいは実はもっと違ったものであるかもしれない。あくまでも筆者が見て感じたネパールの中のその一部だということをご理解いただければと思う。

「アバウト」であることは，ポジティブ・ネガティブ両面をはらんでいる。よく言えば，細かいことはあまり気にしない，ということ。同じモノを作っても日本では欠陥品として扱われるようなものでも，ネパールではちゃんと製品として流通している。そういう「アバウト」さが根底にあるので，計画を立てたり，見通しを正確に立てたりすることも苦手なように思える。最終的になんとなくそれらしいところに着地して，「細かいところに難点があるものの概ね成功した」ということになる。

そう考えると，知らないのに教えてくれたりだとか，「時間」に対する考え方も，ただ嘘つきだったり時間にルーズなのではなく「アバウト」さに由来するものなのだということが分かる。

「勤勉」「緻密」「正確」であることが「是」とされる日本。それが故に起きる過労死だとか，鉄道事故だとか，必ずしも私たちが「良いこと」と思っていたことも，実はそうではないということに気づくことがある。あるいは日本人は逆に「きっちり」しすぎているのかもしれない。「アバウト」であるということは，「他人を許すこと」にもつながる。自分にだけ優しいのではなく，他人にも優しいのだ。うまくいかないことでも「しかたない」と思えるのだ。ネパールの人の側面の一つとして「アバウト」をキーワードにしてとらえると，

この他にもネパールのいろいろなことがきっと見えてくるはずだと思う。

世界中には様々な異なった文化・習慣を持っている人たちがいる。文化そのものに優劣はないはずだ。ネパールに限ったことではないが，文化の違う国の人とつきあっていくためには，お互いの文化を知り，尊重し認め合っていくことが大切だということは，我々も頭では重々承知しているはずである。現実的にはいろいろな軋轢や苛立ち，理解できないこと等のネガティブな局面を迎えることも多々あるだろう。しかし普段から柔軟な心を養っておき，異なった文化をむしろ楽しめるようになったらしめたものだと思う。

【参考文献】

“Nepalko Sambidhan 2072” 制憲議会事務局，2015 年
“Statistical Pocketbook Nepal 2014” ネパール政府中央統計局，2015 年
石井溥編『暮らしがわかるアジア読本　ネパール』河出書房新社，1997 年
『ネパール連邦民主共和国基礎データ』外務省，2016 年
辛島昇他編『［新版］南アジアを知る事典』平凡社，2012 年